レヴァント回廊の歴史を探る
―第10次(2024年)・フェニキアの港バトルーン遺跡の発掘調査―

西山　伸一　中部大学人間力創成教育院・教授
ジャニン・アブドゥル＝マッシーハ　国立レバノン大学・文学人間科学学部芸術・考古学科・教授

Investigating the history of the Levantine Corridor
The Tenth Season (2024): The Excavation of Phoenician Port of Batroun, Lebanon

NISHIYAMA Shin'ichi　Professor, School of General Education, Chubu University
ABDUL MASSIH, Jeanine　Professor, Department of Arts and Archaeology, Faculty of Letters and Human Sciences, Lebanese University

1. はじめに

レバノン共和国の地中海沿岸、ビブロス(現在のジュベイル)とトリポリ(現在のタラーブルス)の中間に位置するバトルーン市の下には、青銅器時代からオスマン朝時代の文化層が堆積している。2018年以来、中部大学とレバノン大学は共同で調査と研究を継続してきた。2024年も、レバノン政府文化省考古総局(DGA: Direction Générale des Antiquités du Liban)の監督下、バトルーン遺跡の発掘調査と保存事業が実施された。発掘調査は、遺跡整備と開発に伴う緊急発掘が含まれていた。今回もレバノン大学側が中心となってフィールドでの作業が行われ、中部大学側は、資金提供や学術アドバイスおよび研究の面で参加した。

2024年はレバノンにとって受難の年となった。2023年10月に始まったイスラエルのガザ侵攻後、日本政府外務省は、バトルーンを含むレバノン北部の危険情報をレベル3(渡航中止勧告)に引き上げた。さらに2024年8月上旬には、ヒズボッラーとイスラエルの衝突の緊張が高まったため、危険情報をレバノン全土でレベル4(退避勧告)に引き上げた。そして、9月下旬には、イスラエルによる無線通信装置・電子機器を使用した爆発攻撃があり、まもなくレバノン南部、ベイルート、ベカー高原などへの空爆が開始された。10月に入ると、イスラエル軍のレバノンへの地上侵攻が始まった。これら一連の展開は、日本側のレバノンへの渡航が完全に遠のく結果となった。そのような状況下でも、安全に十分な注意を払いつつ、バトルーン遺跡の調査は続行された。レバノン大学をはじめとする関係者各位、考古総局職員の努力に大いなる敬意を表したい。その後、11月にヒズボッラーとイスラエルの停戦合意が発動し、レバノンへの攻撃は一時的に停止している。2025年2月に外務省は、ベイルートを含む中央部から北部沿岸地域の危険情報をレベル3に引き下げた。しかし、いまだ余談を許さない状況である。

今回の調査は、第1フェーズが2024年5月7日から7月27日、第2フェーズが2024年10月7日から2025年1月29日の期間に実施された。今回の調査地点は、D地区、H地区、およびM地区の3か所であった(**図1**)。

2024年には、バトルーン遺跡を巡り新たな動きがあった。それは日本政府外務省の草の根文化無償資金協力(Grant Assistance for Cultural Grassroots Project: GCGP)(以下「草の根文化無償」)に、バトルーン遺跡における出土遺構の展示施設整備計画が採択されたのである(プロジェクト名：Project for the Development of Exhibition Facility of Archaeological Site in Batroun)。レバノン側の受け入れ機関は、NGO組織のADUNA(ローラ・サアデ＝ボゴシアン会長)であった。期間は、2024年2月から2025年2月までである。この支援により、後述するようにバトルーン遺跡に目を見張る展示施設が誕生する予定である。以下、H地区、D地区、M地区の順に調査成果を報告する。

2. H地区の調査と保存事業

H地区(Plot 1350-1351)は、2020年に住宅の建て替えに伴い中部大学とレバノン大学による緊急発掘が行われた地点である(西山・アブドゥル＝マッシーハ2021)。その後、地主と考古総局との話し合いで、発

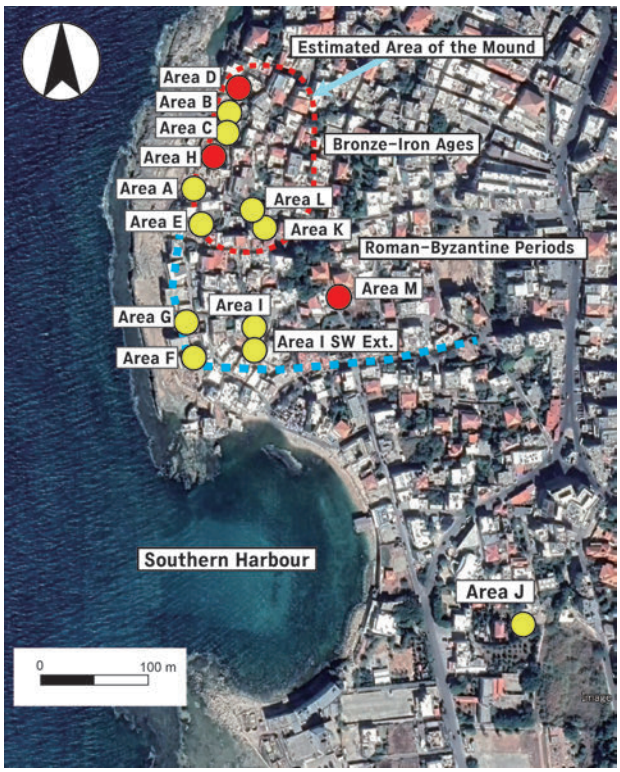

図1　バトルーン遺跡と調査区の分布。左上の沿岸部にD地区とH地区が、中央部にM地区が位置する。

図2　H地区に建設中の住宅(西より)(上)。最下層が出土遺構を保存した状態で展示施設となる(下)。

図3　H地区の鉄器時代石切り場跡(Sector D)全景(北より)。

見された建築遺構を保存し、その上に住宅を建造することとなった。財政危機や不安定な治安状況などを乗り越え、2025年には住宅が完成する予定である。この住宅の最下層のスペースは、上述の「草の根文化無償」の支援によって出土した建築遺構と出土遺物の展示スペースとして生まれ変わる予定である(**図2**)。

そのため今回のH地区の調査では、遺跡整備を含めた発掘と遺構の保存修復作業が行われた。第1フェーズでは、H地区西部で2020年に発見された石切り場跡と東部に一部残されていた未発掘部分の発掘、および東部のペルシア時代の建築遺構の復元と調査区全体の清掃が行われた。

2020年に発見された石切り場跡では、その最大のもの(Sector D)の発掘が未完であった。今回、この遺構を地山まで完全に発掘した(**図3**)。この石切り場跡に堆積した覆土には、大量の鉄器時代II期の遺物が含まれていた。このことから、この遺構は、鉄器時代II期と確実に年代付けられるレバノン唯一の石切り場跡となっている。この覆土からは、鉄器時代II期の在地系土器(Red Slip Burnished Ware, Red Slip Ware, Bichrome Ware, Plain Orange Ware, Grey Ware など)とともに、キプロス系、ギリシア系土器が大量に出土した。さらには土製品、石製品、金属器、印章、土偶、象牙製品、文字資料などが出土し、バトルーン遺跡が、レヴァント地方沿岸部の主要な他の鉄器時代遺跡と同様に、地中海世界と緊密な交流があったことが明らかになった。

また石切り場跡の壁面には、多くの「鑿跡(のみあと)」が残されており、将来的に使用した道具や掘削方法についての考察も可能と思われる。この石切り場

図4　H地区の清掃風景（西より）。

図5　H地区東部におけるペルシア時代建築遺構の復元作業（東より）。

図6　H地区東部で新たに発見された遺構群。手前にシスターン状石製遺構が見える。

跡から出土した遺物はすべて考古総局トリポリ支局に運ばれ、その倉庫に保管されて整理作業を待っている。日本側が近く渡航できた際には、これらの遺物を研究し、鉄器時代のバトルーンの様相に迫りたい。

さて、石切り場跡以外では、住宅の建築が始まる前、H地区東部では出土遺構を保護するため、大量の土嚢袋で発掘した地面を覆っていた。今回、これらをすべて除去し、清掃するところから作業が始まった（**図4**）。また「草の根文化無償」による遺跡の展示施設の構築のため、東部に少し残っていた未調査の部分を発掘した。これについては後述する。

H地区東部では、上述の清掃作業と並行して、過去の調査（考古総局による2017年の緊急調査と中部大学・レバノン大学による2020年の発掘調査）で出土した主にペルシア時代の建築遺構を復元する作業が行われた（**図5**）。調査当時の写真や図面をもとにできるだけ正確に復元することに心を砕いた。また、外からは見えないようにした新たな排水施設を復元した床面の下に設置し、雨水が入っても排水できる工夫を凝らした。

H地区東部の発掘では、南端部分で新たな遺構群が出土した。ここにはオスマン朝時代に構築された「井戸」跡があり、その東、西、および北側で新たな遺構が見つかった。井戸の東側では、平石が敷かれた床面が出土した。おそらく外の空間であり、耐水目的で平石が敷かれたと考えられる。井戸の西側では、地山の砂岩に掘り込んだシスターン状遺構が確認できた。遺構の大きさは、1.3 m×1.36 m、深さは約0.7 mあった。またその南東隅には、2つのカップ状の掘り込みが見つかった（**図6**）。この遺構の性格は目下検討中であるが、何かの液体を貯めておく容器のような用途があったと考えられる。さらに、井戸の北側では、石積み壁が出土し、長方形の部屋が存在したことが判明した。この部屋は、入口が北面にあり、その部分のみが切石（アシュラー）で構築されていた。以上、井戸の周辺で確認できたこれらの遺構は出土土器からすべて鉄器時代II期に年代付けられる。

H地区の石切り場跡や東部の発掘調査がすべて終了し、作業は2024年10月より第2フェーズに入った。まず、H地区の東端から見学者が入るパス（見学通路）の構築が開始された。金属製のパスは、東端からL字に折れ曲がって遺跡の堆積層（東セクション）、ペ

図7　H地区の整備計画の図面(平面図)。橙色に塗られているのがパス(見学通路)である。

ルシア時代の建築遺構を見た後、プロジェクターによる投影スクリーンと説明パネルのある中央部に見学者を案内する。その後、見学者は、石切り場跡を見て、海岸部に降り立ち海際を散策できるようになっている(**図7**)。一般住居を利用してこのような出土遺構の見学ができる施設が建造されるのは、レバノンでも非常に珍しい。そして、この施設の整備には、日本の「草の根文化無償」の支援があったことは記憶されてもよいと思う。

3. D地区

この地区は、H地区の北に位置し、2018年と2019年に発掘が行われた調査区である。ここでは、バトルーン遺跡で初めて本格的に鉄器時代とペルシア時代の遺構が調査された。この地区も地主の好意により出土遺構が見学できる地点となっている。しかし、ここ数年は手入れがされておらず、植物が繁茂する状態となっていた。今回、私たちは、地主や考古総局と協議し、新たな整備を実施した。ここでは、実験的試みとして出土遺構の時代や性格を異なる色の砂利を使って表現する方法を採用している(**図8**)。

図8　D地区の整備の様相。異なる色の砂利(上)。それらを整備した遺構の床に敷き詰め、見学者が時代を視覚的に理解できるようにした(下)。

4. M地区

M地区(Plot 1412)は、2021年に発掘したI地区の東に位置する。ここの調査も住宅の建て替えに伴う緊急調査であった。この地区では、2023年／2024年の試掘でローマ時代の道路と思われる石組遺構が検出された。今回の調査は、その南側において「道路」遺構が継続するかどうかを確認した。結果として、イスラーム時代のピットを含む攪乱がひどく、遺構の残りは非常に悪かった。このため「道路」遺構の南端は明らかにすることはできず、道幅については不明であった。少なくとも道路遺構は、南西から北東方向に延びることが確認できた(**図9**)。

5. まとめ

バトルーン遺跡の調査は、第10次を迎えた。現代の町が遺跡を覆うという難しい状況のもとで私たちは、地道に調査を進めてきた。2024年のレバノンの治安状況は、非常に厳しいものとなった。それにもかかわらず、調査や保存修復作業を進めていただいたレバノン大学の関係者には感謝しかない。バトルーン遺跡は、青銅器時代からオスマン朝時代までの非常に長いタイムスパンでの歴史構築が可能な遺跡であり、今回の保存修復作業により、新たな観光地としての魅力も高め

図9　M地区の新たな調査区。ローマ時代の層がイスラーム時代の攪乱によって破壊されている。

ていけると考える。

最後に、中部大学は、レバノンに対し、令和6年度文化遺産国際協力拠点交流事業の委託を文化庁より受けることができた。しかし、前述したような治安状況により、残念ながらオンラインや第三国を利用した人材育成や技術移転となった。レバノンには優秀な人材が多々いるが、文化遺産保護には多くの課題が山積しているのも事実である。今後とも、考古学調査と文化遺産保護事業を並行して継続できればと思っている。

バトルーン遺跡の発掘調査は、レバノン大学、中部大学、および個人出資者からの支援を受けて実施された。調査にあたっては、レバノン文化省考古総局のSarkis el-Khoury総裁、同局北レバノン地域担当官Samar Karam女史、および在バトルーンの考古総局職員の方々より多大なる支援をいただいた。発掘調査および保存修復作業では、Vilma Braidy Hanna（レバノン大学）、Mouhamad Abdel Sater（レバノン大学）、Nehme Abou Rjeily（レバノン大学）、Eliana Tablieh（レバノン考古総局）、Sirin Ghieh（レバノン考古総局）、Hassan Ghaddar（レバノン大学）、Roland Haddad（フリーランス、およびWormhole Architecture）Paula Abou Harb（Wormhole Architecture）の協力を得た。この場をかりて関係諸氏に厚く御礼申し上げます。

■参考文献

・J. Abdul Massih and S. Nishiyama 2024. *Batroun BAT* 1350–51, & *BAT* 1412 *Excavation: DGA/LU/Chubu Japan* (Report submitted to the Lebanese DGA, January 2025).
・西山伸一・J. アブドゥル＝マッシーハ　2021「レヴァント回廊の歴史を掘る―第6次（2020年）・フェニキアの港バトルーン遺跡の発掘調査」『第28回西アジア発掘調査報告会報告集　令和2年度　考古学が語る古代オリエント』41–46頁　日本西アジア考古学会
・西山伸一・J. アブドゥル＝マッシーハ　2022「レヴァント回廊の歴史を掘る―第7次（2021年）・フェニキアの港バトルーン遺跡の発掘調査」『第29回西アジア発掘調査報告会報告集　令和3年度　考古学が語る古代オリエント』38–42頁　日本西アジア考古学会
・西山伸一・J. アブドゥル＝マッシーハ　2023「レヴァント回廊の歴史を掘る―第8次（2022年）・フェニキアの港バトルーン遺跡の発掘調査」『第30回西アジア発掘調査報告会報告集　令和4年度　考古学が語る古代オリエント』119–123頁　日本西アジア考古学会
・西山伸一・J. アブドゥル＝マッシーハ　2024「レヴァント回廊の歴史を掘る―第9次（2023年）・フェニキアの港バトルーン遺跡の発掘調査」『第31回西アジア発掘調査報告会報告集　令和5年度　考古学が語る古代オリエント』134–138頁　日本西アジア考古学会